

Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.159

2016.12.1

*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

● 神村 透

田舎考古学人回想誌

52

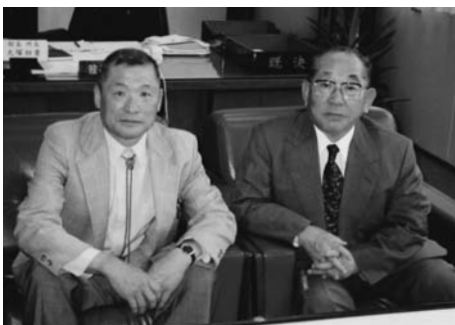
「長野県史に関わって 県的な仕事に参加する喜び」

昭和43年(1968)に長野県史刊行会が設立され、専門委員会に考古学では樋口昇一さんが入った。長野県史考古資料編は樋口さんが基本方針を検討し、51年に考古資料調査委員会が組織された。委員は永峯光一・戸沢充則・森嶋稔・樋口昇一・桐原健・神村透の6人でした。構成や編纂計画を検討し、考古資料編全一巻。第一冊遺跡地名表・第二・三冊主要遺跡・第四冊遺構・遺物となった。推進のため県史刊行会の中に考古部門が設けられ常任編纂委員として桐原(53~61)が、後に宮下健司(54~H1)と樋口(56~60)が加わった。一番基礎的な仕事を進めてくれたのが宮下さんでした。53年に遺跡地名表作成が始まり私は木曾郡を木曾の仲間10人と担当し、旧石器31・縄文407・弥生13・古墳3・平安106計477遺跡のカードを作成した。54年に岩崎卓也・笹沢浩も編纂委員に加わり、主要遺跡編に収録する遺跡と執筆者を選定した。第二冊は北東信・三冊は中南信で、私は東信で三分南遺跡、中信で林頭・二本木稲荷沢・御嶽神社里宮・崩越・巴松・お玉の森遺跡、南信で石子原・増野川子石・立野・尾越・鳴尾天白・増野新切・林里・北原・権現堂前・さつみ・杉の木平遺跡と19遺跡を担当した。いずれも私が調査を担当した遺跡でこのように幾つも主要遺跡として取り上げられ紹介できたのが嬉しかった。

遺構・遺物編では、『長野県考古学辞典』という願いもこめられて構成が検討され、私は弥生時代を担当し、時代と編年は弥生土器を概観・波及期・中期後半・後期、それを各地方に分けてまとめた。生産と生活の道具では概観・石器・木製品・骨角器・金属器・土器を用途別に区分してまとめた。住居と集落では住居・集落・集落の分布と広がりについてまとめた。原始・古代のモノの動きでは水神平式・遠賀川系土器の分布、中島式土器・箱清水式土器の分布、管玉・ガラス小玉の分布、青銅器の分布、方形周溝墓の分

布を図にした。信仰と葬制は永峯・宮下さんをお願いした。県下の全ての遺跡の遺構・遺物の図面を一定の縮尺にしてコピーして送ってくれたのは宮下君でした。莫大なコピーを見てはじめての資料が多くそれを私は土器・石器・金属器・住居址・集落等に分類し、さらには取捨選択し図面を作成した。それを元に解説原稿を書いた。一番大変だったのは図面作成でした。それぞれに見通しをもって選択するので、私の考古学的見識を評価される点からもその見通しを建てるのに苦労した。ともあれ全県的に弥生時代の資料を実見できまとめたので本当に勉強になった。この仕事で宮下さんの苦労は大変だったと思うが、旧石器時代から歴史時代までの全ての文献にあたりコピーし、時代別に区分し担当者に送る作業をしたことから、全県的に視野を持つてみることも出来て考古学的力をつけたのは宮下さんでした。若手の県内一の考古学研究者になったのは当然でした。考古資料編は53年から始まり63年に完了した。

一方通史の編纂が早急の問題として話題となり、期間・巻数が検討され、全10巻の計画で57年から各巻別に着手した。第一巻は当初別巻であったのが一冊にされ原始・古代となった。通史編企画委員に戸沢さんが、原始編纂委員に指導・監修は永峯・戸沢・岩崎が、委員に樋口・森嶋・桐原・神村・笹沢・宮下と資料編関係者がそのままなり、時代担当も引き続き私は弥生時代を執筆することになった。第二章科野国の成り立ち 第一節農耕社会の定着 弥生時代の構成 農耕文化の波及と定着 農耕のムラと技術 ムラからクニへ の内容が委員会検討で決まり、原稿を書くことになった。県民を相手に内容を分かってもらえる文章は簡単なようで難しかった。初稿は戸沢さんが読んですぐ返された。二稿・三稿と戸沢さんの訂正・加筆があつてようやく脱稿できた。さすがに戸沢さんだただ感服するばかりで、通史が平成元年(1989)刊行され手にしたときは感動・涙でした。資料編・通史と関わらせてもらい研究者の一人として嬉しかった。



▲山梨県立考古博物館で大塚初重館長(当時)と

※巻頭連載は隔月です。次回は鈴木正博さんです。

目次

- | | |
|---|--|
| ■田舎考古学人回想誌 長野県史に関わって 県的な仕事に参加する喜び 神村 透 …1 | ■リレーエッセイ マイ・フェイスレット・サイト(第152回) 川村 勝 …3 |
| ■考古学の履歴書 過ぎし日の軌跡-女として考古学研究者として-(第15回) 岡田淳子 …2 | ■考古学者の書棚 「シュリーマン旅行記 清国・日本」 宮崎由利江 …4 |

考古学の履歴書

過ぎし日の軌跡 —女として考古学研究者として—(第15回) 岡田 淳子

⑮ホット・スプリング集落遺跡と貝塚

アラスカ半島ポート・モラーのホット・スプリング(Hot Springs)遺跡で、1972年から1984年まで夏の6シーズンに亘って発掘調査を続けた。国の科学研究費によるもので、現地調査と国内整理を一年おきに行うのが望ましいとされていたためである。毎回、基本的な報告書は英文で出してきたが、年次報告書の他に、小論文を幾つか書き、かなりまとまったものとしては、「ポート・モラー 一気候条件と生態環境を克服した人びと」を『環北太平洋の環境と文化』(北海道大学出版会2006,3)に共著で載せた。これは、もともと1989年にシアトルで行われた「Cross Roads of Continents」展示記念の国際学会で発表した英文の論文を日本語にしたものである。

ホット・スプリング遺跡の最も古い文化層は、ポート・モラー湾口の岬の突端南東側にあったので、ここから住み始めたものと思われた。地層からは絶対年代を判定できていないが、放射性炭素の測定では4,200BP前後であった。物理学的方法は判定が難しく、日本と米国とで結果が異なっている。関東ローム層に似た火山灰の多い明るい色の粘土層に竪穴住居が造られ、梯子による天井からの出入りが推定された。板石で補強された梯子据付用の窪みや煙道のある炉も発見されている。

この上に重なるように造られた住居の床面には、廃棄された後に男性二人の遺体を仰臥伸展葬で埋葬し、楕円形の住居の縁近くには10歳前後の子供二人と、嬰兒も埋葬されていた。更に住居の縁で内側を向いたイルカの頭骨が、7個も弧状に並び、床の中央付近には、^{あかり}灯り+暖房用の大型石ランプも残っていた。この頃からサケの骨が増え、貝層も岩礁性のものに砂泥性のものが加わるようになる。

その後、人口が増えたのか断面には住居の切り合いが多く見られ、集落も北西や南西低地へと広がって行く。花粉分析によると、3,000BP頃が暖かく乾いた時期で、最も過ごし易かったのか貝層も発達する。祭りの場所であろうと思われる遺構がはっきりするのもこの時期である。その後、湿潤な時期を迎え、気温が低くなると遺物が少なく黒っぽい層に変わる。この層の一部には、細かい砂利や赤色の沈澱物が見られて、水の影響が考えられる部分もあった。年代は2,000BP前後である。

やがて再び遺構の多い1,500BPから1,200BPの時期を迎える。地表に見える窪みのほとんどがこの時期のもので、うち6軒を発掘したが、すべてが住居跡であった。

また伸展葬の墓が見られなくなり、頭骨だけを遺体から離して住居内などに再葬するようになる。骨学の権威山口敏さんの細かい分析によれば、前半の人骨は北のベーリング海峡から北極海沿岸の骨と共通点があり、後半の人骨はアラスカに広く残るエスキモーの骨と似ているとのことである。この遺跡に最初に住みついた人は、北のベーリング海峡付近から移ってきたものであろうか。アリユートに似た人骨は発見されていない。

後半の貝層は、現地でカックル・シェルと呼ぶ二枚貝(エゾイシカゲ貝)が多い厚い純貝層である。この遺跡の二度目の温暖な時期で、再び人口が増えたものと思われた。更に、貝層を伴わない住居が幾つか知られ、1,000~600BPの値が出ている。

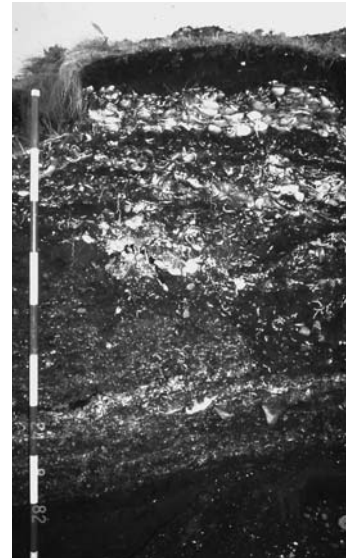
これを最後に人は住まなくなったと考えられるが、その理由は明らかではない。

飛行機をチャーターしたり、ヘリコプターに乗せて貰ったりして、湾内を調べてみたが、同時代の小さな貝塚が岬の少し西に見つかっただけで、他に遺跡を見つけることはできなかった。少し離れるが缶詰工場の北東、ベーリング海に注ぐ小河川上流のベア・レイクに、更に新しい竪穴の集落跡を発見した。貝を食に利用せず、食材を鮭に特化したようである。年代の特定はできないものの遺物から500年以上は遡らないと思われる。

湾内の奥は万年雪を被った山が聳えている。流れがあり、人の住めそうなところに小型機を降ろしてもらって、矢島國雄さんと付近を半日捜し歩いたが、遺跡はやはり見つけられなかった。小さな流れには雌雄のサケが上るのを見ているし、岸边には石炭の露頭も見た。この質の良い石炭は、口唇具などに加工され、遺跡にも残されている。

出土の遺物はほとんどが石器と骨角器である。石器は硬質の安山岩を利用した尖頭器、ナイフ、肉厚の削ぎ具と、多孔質の石を使った砥ぎ具、大小の石錘(2~40グラム)が多数を占めていた。骨角器ではさまざまな槍や銚の部品、火切り用の臼を含む工具、大型獣の頭骨や肩甲骨を加工したシャベル、鳥管骨製の目途のある細い針、篋や刺突具が多く、彫刻のある髪飾り、小さな人像の頭部、仮面なども出土した。土器はないが骨角器はオホーツク文化のそれと似た部分がある。当地域に特徴的なものとしては石皿型のランプ、罎に用いたらしい2キログラム以上もある石錘などがあげられよう。

潮の干満が著しい遠浅の海の貝はもちろんのこと、岩上に棲む貝、時を選ばず捕れるカレイや、夏の半年を彩るサケなどの魚類、時々寄ってくる北の海獣、水を飲みに来るカリブー(野生トナカイ)、春はスカンボやスイバやコゴミなどの植物、秋はベリー類と、彼らの食生活はかなり豊かであったに相違ない。温泉の存在と共に、この土地が長く利用され続けた理由であろう。



▲ホット・スプリング遺跡Uトレンチ貝層

略歴

1932年	東京府豊多摩郡代々幡町(現渋谷区初台)に生まれる
1949年	東京都立第五高等学校 卒(学制改正)
1950年	東京都立富士高等学校 卒
1955年	明治大学文学部史学地理学科(考古学) 卒
1958年	東京大学大学院生物系研究科(人類学)修士修了
1961年	明治大学大学院文学研究科(史学)博士単位取得
1961~64年	東京都立武蔵野郷土館学芸員(常勤臨時職員)
1964~66年	米国ウィスコンシン大学人類学部 研究員
1967~77年	国立(クニタチ)音楽大学 専任教員
1978~88年	北海道大学理学部・文学部 専任教員
1988~2004年	北海道東海大学国際文化学部 専任教員(1998年より特任)
2010年~現在	北海道立北方民族博物館 館長(非常勤)

隔月連載です。次回は間壁忠彦先生・間壁葎子先生です。

Uレーエッセイ

マイ・フェイバレット・サイト 152

陸平貝塚 ～茨城県美浦村～

川村 勝

陸平貝塚は、茨城県稲敷郡美浦村大字土浦及び馬見山に位置し、稲敷台地東端の独立した台地上に立地する。貝塚が形成された縄文時代には、鹿島灘から湾入する内海に浮かぶ小島であったことがボーリング調査の結果明らかとなっている。

近年までの調査の結果、貝塚の形成は縄文時代早期後葉条痕文期に始まり、後期前葉堀之内2式期まで及んでいることが判明している。これらの時期の貝層は台地斜面に環状に8ヶ所残されており、場所によって貝層の厚さは5m程に及ぶ。陸平貝塚を構成する貝はハマグリが卓越し、これにシオフキ・サルボオ・アサリ・オキシジミなどが加わる。このことから当時の貝塚周辺には内湾砂泥質の前浜干潟や泥質の入江干潟など、多様な水辺環境が見られたことが伺える。同時に見つかる骨類では魚骨が圧倒的に多く、特に内湾性種のボラ・クロダイ・スズキ・キス・コノシロ・ハゼなどの利用が目立つ。また後期にはウナギのサンプル数が飛躍的に増加する特徴が認められる。

こうした資源を利用した人々の住居跡などの生活痕跡については、実はよく分かっていない。過去の調査では中・後期の竪穴住居跡と考えられる遺構は見つかっているが、部分的な調査にとどまり、集落形態を検討するほどの情報は未だ蓄積されておらず今後の課題である。時間的なボリュームを考慮しても膨大な貝を残している陸平貝塚の性格とともに、その解明は将来の楽しみでもある。

日本考古学史を学ぶ者は必ず“陸平貝塚”という遺跡名は耳にしているはずである。明治10年に大森貝塚の調査を手がけたアメリカ人の動物学者、E.S.モースに師事した佐々木忠二（ひらたけ ちゅうじ）郎・飯島魁（いらいま けい）（共に当時東京大学生物学科生徒）により、明治12年に最初の調査が行われた。これにより学史上では“はじめて日本人のみによる発掘調査が行われた遺跡”として紹介されることが多い。これに加えモースの大森貝塚に做った英文の報告書も刊行され、正に“はじめて日本人のみによる発掘調査から報告書刊行まで行われた遺跡”とも言えるのである。

こうした記念碑的な性格も有する陸平貝塚ではあるが、平成10年に国史跡になるまでの道程は決して平坦なものではなかった。最初の調査後、東京人類學會雑誌などに資料が取り上

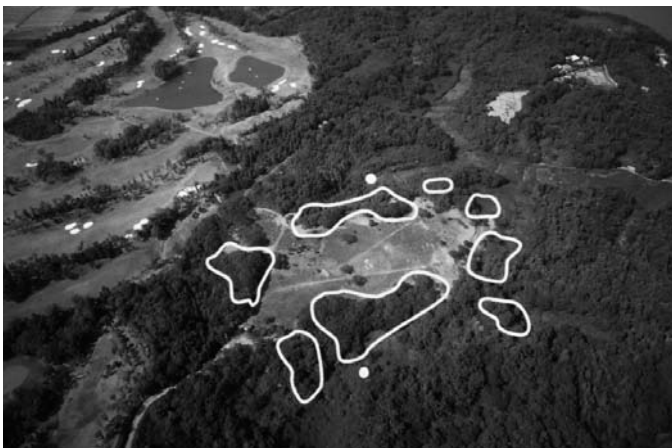
げられるなど、斯界では著名であった陸平貝塚は、当時の“貝塚発掘ブーム”とも言うべき風潮の中で、優品・珍品目当ての、とても今では発掘とは呼べない言わば乱掘・盗掘の嵐に遭遇する。嵐が過ぎ去った貝塚の状況を、その一翼を担っていた江見水蔭は「ほぼ全滅」と表現している。さすがに全滅とはいかないまでも、相当に攪乱されたことは間違いない。このような盗掘の被害は昭和50年前後にも経験し、当時のマスコミにもしばしば取り上げられている。

陸平貝塚の学史的な評価を考えれば、もっと早く史跡に指定されていても不思議ではなく、指定により少なくとも不要な盗掘は防げたはずである。最も古い記録では、昭和23年に東京大学人類学教室で陸平貝塚を調査した際に史跡指定の話が出ていたようである。その後茨城県でも昭和40年代頃までかなり具体的な整備を含めた計画が進んでいたことを示す記録が残されている。そうした頃に、陸平貝塚を含めた一帯に地域振興の一環としてリゾート開発の話が持ち上がる。幸いにこれを察知した常総台地研究会が全国的な保存運動を展開し、経済情勢の変化とも相まってこの時の開発は中止となった。しかし虫食い状態で残された用地の在り方は決して望ましい状況とは言えず、村では新たな地域振興策を計画することになる。計画を推進した当時の美浦村長・市川紀行氏は、この時自身の心情を次のように吐露している。それは、「通常かかる遺跡保存問題は開発行為に付属従属し、言わば“邪魔物は消せ”という発想及び関係にあるが、今回は陸平貝塚そのものと開発は並列同義であり、精神的にはむしろ優位にあると断言できる」、というものである。

地域の多くの方が陸平貝塚の価値と魅力に気づき、「陸平をヨイショする会」という応援団を結成し、今でも保存と活用に積極的に関わっているという状況を現出させたのは、正にこの言葉が原点であった。

紙幅では語りつくせない多くの人々の思いと願いが詰まっている陸平貝塚。この遺跡に関われる幸せとともに、将来へ確実に伝えなければならぬという緊張感で、今この原稿を書いている。

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは臺 由子さんです。



▲陸平貝塚全景



▲毎年秋に陸平貝塚で開催される縄文ムラまつり—地域のまつりとして定着している

考古学者の書棚

「シュリーマン旅行記 清国・日本」

ハインリッヒ・シュリーマン著 石井和子訳／講談社学術文庫(1998) 宮崎 由利江

ティリンス遺跡をはじめ、数々の発掘で「ギリシア考古学の父」などとよばれるシュリーマンの中国・日本旅行記です。私はつい最近、ある本の参考文献で偶然に知りました。そもそもシュリーマンが日本に来た事すら知らなかったと思っていたのですが、考えてみると、高校時代に買ってもらった筑摩書房の「現代世界ノンフィクション全集」の2巻に「トロイアへの道」が入っています。何十年かぶりに目を通した結果、「考古学に専念し生涯の夢の実現にうちこむまえに、もうすこし世界を見ておきたいと思った。」とあり、テュニス、エジプト、インド、セイロン島、マドラス、カルカッタ、ベナーレス、アグラ、ラクナウ、デリー、ヒマラヤ山脈、シンガポール、ジャワ島、香港、広東、廈門、福州、上海、天津、北京、万里の長城に続いて、日本の江戸と横浜という記述がちゃんとありました。日本の後はサンフランシスコ、ニカラグア、合衆国東部、ハワイ、メキシコシティをまわってパリに行ったようです。どうも、トロイアの発掘の部分に目を奪われて、読みとばしたようです。

シュリーマンは1865年(慶応元年)6月1日に来日、7月4日までの約1ヶ月間滞在しています。江戸中心とはいえ、尊王攘夷の嵐が吹き荒れる中、よくこれだけのものを見、詳しく観察したと感心します。本書は、訳者石井和子氏の御子息石井寛治氏が、パリ国立図書館で、フランス語の原本の日本の部分をコピーして持ち帰り、和子氏が翻訳したのが始まりで、その後全文を入手され、全くの私家版として、1990年に刊行されました。本書の解説を書かれた東京大学名誉教授の木村尚三郎氏の薦めで、講談社学術文庫として公刊されたそうですが、美しい日本語と丁寧な訳註、さらに寛治氏が用意された数々の参考図版と、いかにも元私家版らしい素敵な本です。章立ては、以下のようです。

- 第一章 万里の長城
- 第二章 北京から上海へ
- 第三章 上海
- 第四章 江戸上陸
- 第五章 八王子
- 第六章 江戸
- 第七章 日本文明論
- 第八章 太平洋

第六章冒頭で、「素晴らしい評判を山ほど聞いていたので、私は江戸へ行きたくてうずうずしていた。」とあり、シュリーマンは世界旅行の中でも、江戸に行きたかったようです。

「外国列強の公使たち及びその随行員のほかには江戸を訪問することができない。しかも残念なことに、諸公使たちは彼ら自身またその随員たちの生命が危うくなるような襲撃に幾度も遭ったため、ずいぶん前から江戸を立退いてしまっている。」と状況を十分に理解した上で、八方手を尽くして来日したようです。当然、監視を兼ねた厳重な警護が、お風呂場までついて

来るのに辟易しながらも、案外のんびりと、増上寺、浅草寺などお寺はもちろん、吉原や寺子屋、浅草の見世物小屋、芝居見物まで楽しんでいきます。

考古学に専念するために打ち切るまで、彼は得意の外国語を使って、インド藍・オリーブ油・綿布・茶・塗料、さらに軍事物資の硝石・硫黄・鉛などの輸出入貿易をしていた大商人ですから、経済的な視点で日本文化をながめます。チップからおもちゃの値段、大名の石高まで、フランス通貨に換算して書き込んであるのがおもしろいところです。

例えば、「大名加賀前田加賀守は年間石高百二十万二千七百石、すなわち一石十七・三フランとして換算すれば二千八十万六千七百十フランである。」など、どちらも現代日本人としてはピンとこないものの、何だかわかったような気になります。

梅雨時の来日で雨が多い中、馬を借りて「絹の生産地である大きな手工芸の町八王子」までイギリス人6人と行ったのも、貿易品のシルクに興味があったからでしょう。桑畑や蚕部屋も見ています。「シナやインドと同様」という表現から、インドや中国でも見て来たのかもしれませんが。シュリーマンが考古学者にならずに、この後「殖産興業」「富国強兵」の日本と商売をしていたら、また違った人生を歩んだことでしょう。日本旅行を終えて、横浜からサンフランシスコに向かう船上の50日間で本書は書き上げられ、処女作として1869年にパリで出版されました。

この原稿のためにインターネットで「シュリーマン」の検索をしたところ、昨年2015年が来日150年に当たり、創立90周年の天理大学参考館が「ギリシア考古学の父シュリーマン」展を開催したのを知りました。巡回展として岡山市立オリエンタ美術館、東京の古代オリエンタ博物館をまわり、横浜ユーラシア文化館では、横浜だけの企画展で、本書の草稿となるシュリーマンの日記がはじめて紹介されたという事です。

在アテネ米国古典学研究所所蔵の「DiaryA6」「DiaryA7」は、前者が忘備録、後者が草稿だそうです。展示は見逃しましたが、記者発表資料(PDF)に表紙と詳細なノートの見開きの写真がありました。いくら記憶力の良いシュリーマンでも何かメモがあるかと思っていましたが、こんなものが残っていたのだと感慨深いものがあります。(尚、展示は2016年12月17日(土)～2017年1月29日(日)名古屋博物館が最終です。)

本書はシュリーマンの旅行記であるだけでなく、現代人の私達が幕末の日常にタイムトラベルできる本でもあります。文庫本で全220頁と、気軽に読めるおもしろい本として御紹介いたします。

アルカ通信 No.159

発行日	2016年12月1日
企画	角張淳一(故人)
発行所	考古学研究所(株)アルカ 〒384-0801 長野県小諸市甲49-15 TEL 0267-25-0299 aruka@aruka.co.jp URL : http://www.aruka.co.jp